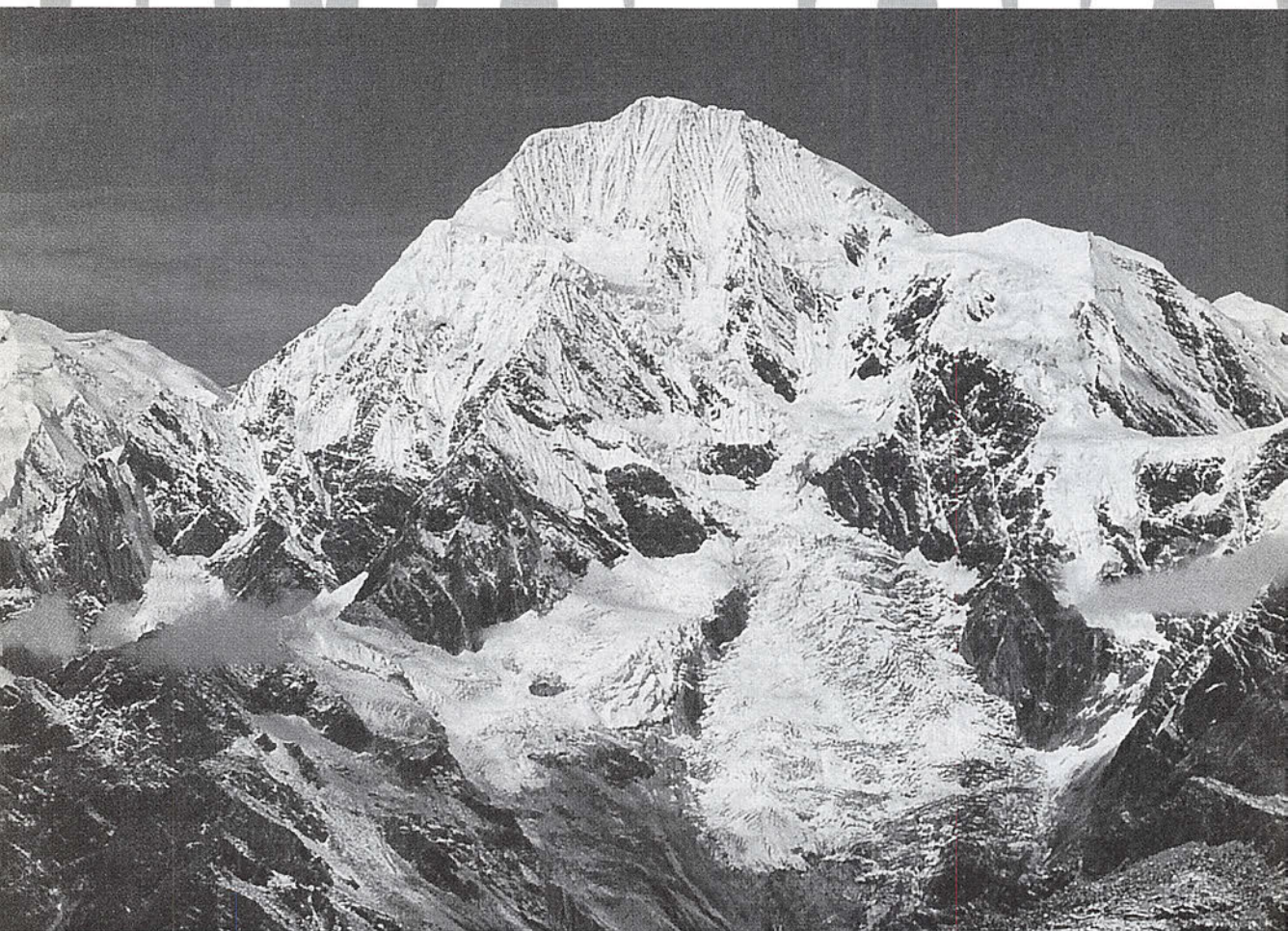


ヒマラヤ

No.299



1996 OCTOBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1997年H A J 登山隊員募集

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1997年7月20日～8月25日(43日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

玉珠峰 (6,179m)

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期 間:1997年7月25日～8月17日(24日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J事務局

ヌン (7,135m)

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1997年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。

カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラダックの素晴らしい雪上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期 間:1997年7月20日～8月24日(36日間)
2. 隊 員:10名
3. 費 用:75万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

秘境の地にあり、かつてはティルマンさえも行きつくことのできなかったアッサムの奥地、アルナチャールはカメン川の源流に聳えるニエギェ・カンサン (7,050m) がI M F隊によって初登頂された。次は更に奥地にある聖山タクパシリになるのだろうか。(K. Y)

ヒマラヤ No.299

- | | |
|------------------------------------|---------------|
| 1. ニエギェ・カンサン (7,050m) 初登頂 | COL.M.P.YADAV |
| 4. 中高年? ヒマラヤ流れ旅(8) チトラルへの道 | 阿部 淳 |
| 8. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・ヒマラヤから・Books> | |
| 11. 八千メートル峰 日本隊挑戦の概要 | |
| 17. 中国高峰登山15年小史(14) 四川・雲南その3 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

ニエギェ・カンサン (7,050m) 初登頂

COL.M.P.YADAV

■はじめに

長大なヒマラヤ山脈の中で、東部ヒマラヤはその神秘性、美しさで群を抜く地域である。荒涼とした地形と深い森が広がり、道は殆どない。人が住むには過酷な環境であり、事実上、この地域への入域は非常に困難なものとなっている。東部ヒマラヤは、過去に探検家や登山家が入域しているが、殆ど記録は残されていない。未だにミステリアスであり、登山の可能性があるかどうかも分からない地域なのである。

ニエギェ・カンサンは、世界の未踏峰の中でも最も高い山のひとつで、アルナチャル・プラデシュ州のカメーン地方西部に位置している。アルナチャル内を流れるカメーン川の源頭にあたるのが、ニエギェ・カンサン氷河である。過去にこの山へ挑戦した隊はなく、登山ルートやアプローチについての資料も全くないので、ルート取りを決めるのは、我々にとって困難な作業となった。我々は、周辺の踏査、ルートの発見、そして登頂という三つの目的を掲げた。

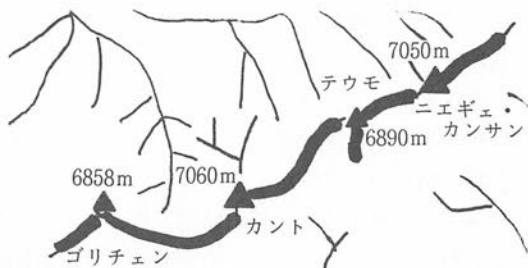
私とクラール准将はまず、アルナチャル・プラデシュ州を訪れた。ポーターの手配、車道その他の道の有無、アプローチ上の最後の村の位置、それから、地元の人々や駐屯軍からどのような援助をどれだけ受けられるかや、登山の季節はいつ頃がいいか等を調べた。軍関係者や地元の権威と相談した結果、アプローチは、スパンシリ南部に取ることにし、ジロ／ハボリを第一候補のロードヘッド、クルン谷のコロリアンを第二候補のロードヘッドに定めた。

■ベース・キャンプを目指して

全ての準備が整い、9月の第1週に出発。ゴーハティに14日到着した。ここからジロまではバスを使ったが、雨の神様から手厚いもてなしを受けてしまった。向こう数日間は回復しそうなもないような、空模様だ。

ジロからコロリアンまでの道中は、幾分天気は良くなった。道幅は2トン車がすれ違える位の余裕があった。コロリアンからサルリまでの35kmは、ひどくぬかるんだ道のトレッキングとなった。その道中、何度も蛇に出くわした。緑色で全身に黒の斑点が散らばっている蛇だった。サルリに着いてから、その蛇が毒蛇であることを知った。谷に住む原住民にも出会った。男性は狩り、女性は機織りの名手で、草葺きの木造家屋が住まいになっていた。彼らの所へは未だ近代文明の波は押し寄せておらず、彼ら独自の文化の中で生活し、ドニ・パロ（太陽と月）を崇拝していた。交通網と経済基盤がないという状況が、近代文明による汚染から彼らを守っていた。谷にはニシン族、スルン族の2部族が定住していたが、ニシン族がスルン族を支配しているようだった。

巡回将校をはじめとするサルリの人々は、ポーター手配に際して色々手助けをしてくれた。地元の人達の何人かは、狩猟の為ミリまで行ったことがあり、ワザインまでの道の開拓に役立つような貴重な情報を提供してくれた。当初、多くの人々がポーターとして働きたいと申し出ていたが、最終的にはごくわずかの人々が、荷物を背負ってワザインまで行くことを承知した。このポーター不足は我々の遠征にとって深刻な問題となった。9月16日、予め手配されていたウツタルカシのポーター達15人によって、隊荷輸送が始まり、9月23日までには殆どの隊荷がワザインに集結した。ジャグモハンとピサ・タザの二人が既にテントを設営



していた。9月24日、私は本隊と共に、この谷最後の村、ミリに向けてサルリを後にした。この日は土砂降り、谷に低い雲がたれこめていた。空中に広がった黒い乱層雲がこの大雨の原因となっていた。ミリに着いた頃にはすっかり日が暮れていた。雨宿りの出来る場所を探し、PDW（公共事業）調査局のバンガローに一夜の宿を借りることにした。竹で出来た小屋で、屋根はバナナの葉で葺いてあった。我々は竹の破片でできたマチャンズ（トラ狩り用の監視台）の上に寝た。この夜は非常に辛い夜となった。天井に沢山のヒルが住みついていたからだ。彼らにしてみれば、久しぶりに豪華な晩餐にありつけた、というわけである。

翌日はワテを目指した。ミリからワテまでは8時間行程で、途中2ダース以上の貧弱な竹梯子を越えなければならなかった。過去に通常の往来は殆どなく、地元の猟師がビビ地区への行き来に使う程度の道らしかった。ワテ手前にかかった藤で編まれた橋は、ポーターの一人が通過した際に壊れてしまったので、我々は丸太で応急の橋をかけ、激流の上を渡った。

ミリとワテの間はひどいぬかるみ道で、藪がうるさく生い茂っていた。おまけに、その中をタイガー・ヒル、蛇、ディムディムなどがうごめいているという状態で、非常にハードな行進となった。ワテでは猟師達が使う小屋に泊まった。連日降り続ける雨は、我々の気分を害した。このような不快な地域には今回限りで二度と来まいと、皆で誓いあった。9月26日、悪天の中4時間歩いてワザインにたどり着いた。ワザインでは新たな問題が発生した。ポーター達がこれ以上仕事を続けられないと言いつけたのだ。彼らは陰鬱な空模様にすっかり怯えきっていた。また、密林の中に入っていくことや、これから先このような厳しい環境の中で長く滞在することも、彼らの不安材料になっていた。何度か話し合った結果、彼らの一部は、さらに多くの給料が保証されるなら仕事を続けるということになり、我々は承知した。

ワザインから先は道がついていないので、我々自身で切り開いて行かなければならなかった。次のキャンプ地までは、高山植物、竹、シャクナゲなどが密生したブッシュの中を進んだ。9月28日、

ジョギアンに到着。コウジャレビビ尾根の上にキャンプを張った。そこからコウジャレ・パスまでは3時間の距離で、パスの200m下が森林限界となっている。このパスからコウジャレ北西稜に沿って、'アギエ・ギカ'の方へ進んだ。'カオ・プベ'の2km先の、稜の下方にいいキャンプサイトを見つけたことができた。ここ一帯は、'カサイ'の名で知られている。

■登山活動開始

翌日、ラタン・シン、A. K. シン、ミリ・ライの3名が、サポートのポーター数名と共にBCへのルート開拓に向かった。天候は悪く、一帯は1日中濃い霧に包まれていた。この霧のせいで、ラタンとA. K. は正確な方向を定めるのに苦労させられた。地図だけを頼りに進むのは非常に困難な作業だった。10月2日、カンワールにキャンプが設けられた。先発隊は、5つの峠越えをしてとうとう、BCへの道を切り開いたのだった。周辺に点在する幾つかの湖は、ピークへの正しい方向を示す良い道しるべとなっていた。その後間もなく、ひどい降雪を押してABCも設営された。標高4,430mの窪地である。

ABCへのルートは簡単なものではなく、山々の過酷な面と向き合うような行程だった。しかも、殆ど悪天候の中での行動となった。ある時はズブ濡れになり、またある時はルートを見失い、再び探し出し、時間切れでテントにたどり着けず食料のないまま野ざらしの状態で一夜を明かす…そんな事は日常茶飯事だった。

翌日、降雪の中ラジヴとロプサンは、窪地を出てパスを登り、ニエギエ・カンサンの稜を探し出す為に北へ向かった。しかし分厚いホワイト・アウトに阻まれ、その試みは失敗に終わってしまい、垂直のアイスフォール手前で引き返した。

私は、彼らが悪天の為にルートを見いだせなかったことを知り、意気消沈してしまった。しかし、希望は捨てまいと、10月13日、別の偵察隊を出した。今度はパスを越えてから南西へ進む指示を出した。偵察隊は午前5時に出発。雪が降りしきる中、2時間精力的に登り続け、ついにパスへたどり着いた。そこからは、カメーン谷の壮大な景色が一望できた。午前10時までに、北東稜上の無名

峰(6,224m)に端を発する氷河の横のモレーン帯に降り立った。氷河上にC1用の適地を見つけ、偵察隊はABCに戻った。

10月14日、悪天下を我々はC1へと出発した。パスに着くまでに、ほんの数分晴れ間が広がり、幸運にもニエギェ・カンサンや、チョモ、その他のピークを目にすることができた。目指すピークの全容を見て、我々はアタックルートを北東稜にとることに決めた。午後1時までにC1へ到着。これで、サルリとC1間の150km上に荷送やパーティのシフト体制が整った。しかし、ポーター不足の問題は未だ改善されず、それに天気は好転の兆しを少しも見せなかった。この2つの問題を考慮し、アタックのメンバーは5人に絞ることに決めた。非常に辛い決断だったが、BCのポーター不足を思うと仕方なかった。

C1から南に目を向けると、青々としたカメーン谷が望めた。このキャンプからも積乱雲の異常な発達が見て取れた。雲はカメーン谷の両側から沸き上がり、北東稜にぶつかると再び谷の方に押し返されていた。あの一面曇った空が、降雪をもたらしていたのだ。また、北側から強風が稜を越えてきて、谷沿いの雲を押し止めている様子も観察できた。四六時中分厚い雲に被われ、ホワイトアウトになっていた理由がよく分かった。

■頂上アタックへ

10月15日、ラタン・シン、ラジヴ・シャルマ、ジャグモハン・シン、ナドゥレ・シュルパ、ロブサンの5名から成るアタック隊が、C2へのルート工作に向かった。'ヒューバ稜'を越えてニエギェ・カンサン氷河に降り立った彼らは、主稜を探そうとしたが、濃霧の為ままならず、結局その日は氷河の突端に中間キャンプを設けた。すぐそばに大きな氷河湖があった。10月16日、相変わらずの悪天の中、バットレス基部にC2を説営(後になって、そこが雪崩やすい場所であることが判明した)。翌17日、アタック隊がC2入りした。

10月18日、大雪の為に視界が効かない悪条件下で、バットレスに8本のロープがフィックスされた。バットレスを登り抜けた所が、コルからのアイスフォール基部だった。バットレス上には浮き石が多く、危険なクライミングを強いられた。そ

の上、アイスフォール上がいつ雪崩れるかという恐怖にも常にさらされた。天気はますます悪くなり、C2のキャンプ・サイトが危険な地帯と化したので、アタック隊はいったん中間キャンプまで下りた。翌日、降雪が大分おさまったので、彼らは再びC2入りした。

10月20日、激しい降雪の中でアイスフォール上に6本のロープが固定された。同日、サポート隊によってC2への荷上げが行われた。翌21日、5本のロープが固定され、ルートはコルまで達した。コルに出ると風が強くなり、スピードが上がりなくなった。当初はコルにC3を設ける予定だったが、あまりの強風にそれは無理ということになり、アタック隊はアイスフォールまで引き返してビバークした。22日、C3設営のために、出発。コルから北に走る氷河を約200m下り、昼までにC3(アタックキャンプ)を設営した。

10月23日午前3時、アタック隊の5人はロープを結びあって、出発した。まず北側の岩峰を目指し、そこより北東稜をたどって頂上を目指す計画であった。幸いにも晴れ渡っていた。しかし、午前七時頃より、強風が吹き荒れ始めた。北東稜への登りは険しかったが、隊員達は勇気を振り絞って、じりじりと高度を上げていった。午前9時、北東稜上に抜け、そして午前11時15分、登頂に成功した。我々にとっては二重のお祝い事となった。ひとつは勿論登頂できたことであり、もうひとつは、10月23日がちょうどディワリ・ディ(ヒンドゥ教の新年)だったのだ。頂上には三色から成る国旗が立てられた。隊員達は神に祈りを捧げ、また各々捧げ物を置いた。15分間程頂上にいる間に、写真撮影を行い、そして、眼下に広がる眺望を楽しんだ。チベット側は陽光にまぶしく照らし出され、インド側の谷という谷が雲で被われている、というコントラストには全員目を見張った。頂上からの光景は彼らにとって一生忘れられないものとなるだろう。午後3時30分、C3に帰着。

それ以降のアタックは、再び悪化した天候の為、取り止めとなった。10月30日までに全てのキャンプは撤収され、全員サルリに戻った。そして、11月12日デリーに着いた。

(H J Vol.52より 訳・菅原愛里)

パキスタン (Ⅲ) チトラルへの道

(1)ガイド・トラブル

阿部 淳

札幌を出てから百日を超えているが帰趨本能などはどこにもなく、三十余年の企業戦士のシガラミから抜けた自由王国を、思い切りエンジョイしている自分を感じる。それでいて、目的もなくボケーッと過ごす気心は生まれず、つい先を考えてしまう癖はサラリーマン症候群から抜け切っていない証拠だろうか。

パキスタンも25日目となると、人の見分けも少しはつくようになった。何せ街は殆ど男ばかりで、やたらに同じ白い服に鼻髭の(教義上)、同じタイプばかりで始めは妙な戸惑いを覚えた。物の言い方も親切そうな反面、一様にいい加減で、それも元来単純で神任せの一面から来ているせいらしい。

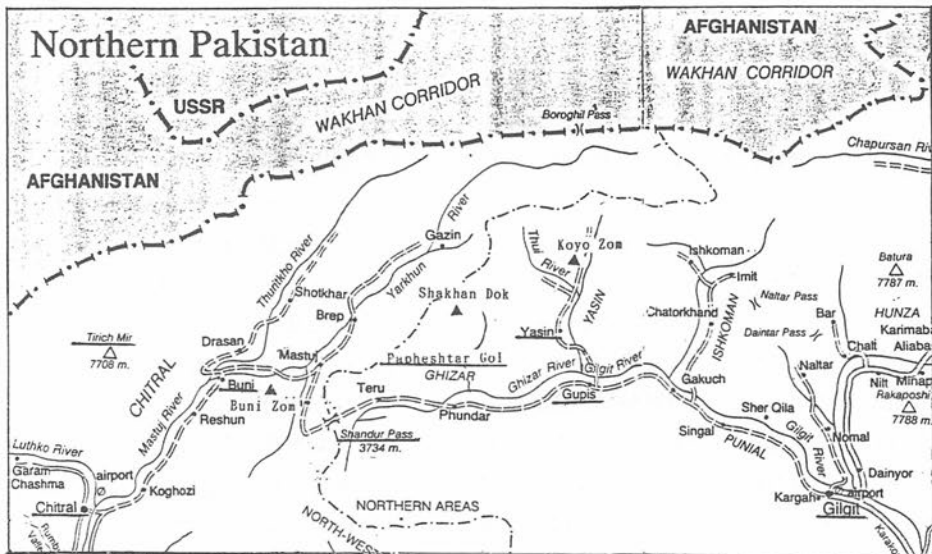
●キザっぽいガイド

6/16、ギルギットのPTDCのホテルの部屋に、シルクロード・ツアー社のガイド、30代半ば位の感じのケイジ君が現れた。初対面から何か一癖ありそうな感じがしたが案の定であった。持参した荷袋をフロアにドスンと放り投げ、「食料(イスラマバードから持参?)がこれで良いかチェックして欲しい。ワsshはガイドであってコックではないから」おまけに「アンタは小食だと聞いたが

ワsshは大食いなんで」…自分の食べる量までサーブにチェックさせる魂胆らしい。「督永婦人から、「ガイドであるがコックもやる」と聞いて契約したのだ。君はここではシルクロード・ツアー社を代表しているのではないのか?」と言うと黙った。そして「私の食料分の種類と量はほぼよいだろう。君の分については知らない、私はサーブであってコックではない。自分でチェックせよ!」と命じて突き放す。夕方一緒に街へ出て不足物資購入、愛用のオリンパス・ズーム115が不調だが修理不能でタイ製の安カメラ(約5,000円)購入、散髪(25Prs=¥65)して準備終了。念願のギルギット・ウエイ、辺境チトラルへ向けてジープ・サファリ&トレッキングの出発である。

●やくざガイドはどうする

広いギルギット川沿いに進むが、15℃(Min)~40℃(Max)の暑期中、未舗装の埃っぽい道路をオープン・ジープで走るのはいかにも厳しい。途中シェルクィラ・フォト(旧王城)に寄り、ガクチのレストハウスで宿泊またはキャンプの交渉をしたがボス不在でダメ。しかしオフィサーはチラ



Based on Isobel Shaw.

スでジープに乗せてやった人でグピスのレストハウスを紹介してくれた。そこでは花のある芝生にテントを張る。ここのマネジャーも良かったが、庭で同席して話した近所の役人は世界の動向に詳しく、日本の経済にも強い関心を示していた。

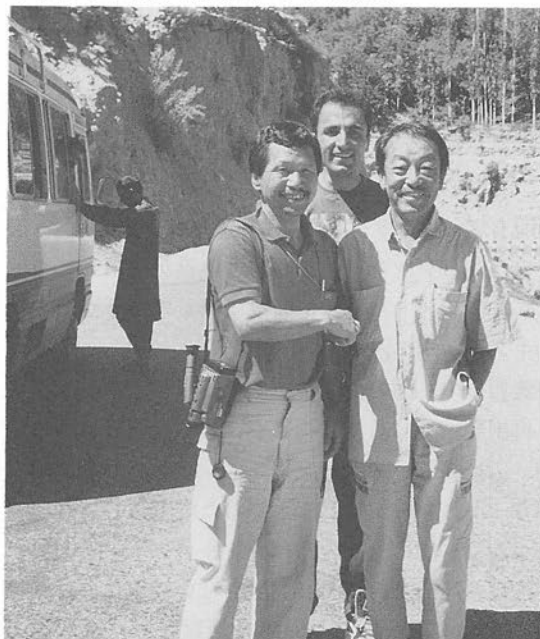
ガイド&コックのケイジは、この昼は（ガクチで）食堂で昼食をしたいと言うし、夜はこのキッチンが使えないので別宿の食堂で食事をしたいと言う。夜7時半に見当たらないので一人で安食堂へ行くと、既にドライバーを連れて食べていて知らん顔であった。それで彼の行動と義務感を観察する事にした。翌朝は案の定、コーヒーも食事も用意する気配がなく、「朝食は食堂で」と言うので、「キッチンを使えるぞ」と言い放っておき、このレストハウスのコックのじいさんに（英語が通じないので）ドライバーを通じて打診するとOKどころか、ジャム・ミルクティ付チャパティを二人分作ってくれた。ケイジは依然として料理などする気が無い事がこれで確定した。彼はおまけに（後で知ったが）自分用のテントを持参しておらず、ここのマネジャーに宿を頼んだらしいがマネジャーはひどく不快感を表していた。ギルギットのPTDCホテルのマネジャーも“彼はどこの人間か、フンザか？”と訝っていたのだが、どうも同じパキスタン人（役人）に対しても横柄でキザでガラが悪く、嫌がられるらしい。あと2週間以上、この先の辺境でこのヤクザ・ガイドと付き合うなんて真っ平御免だ。決めた、解雇だ。

●遂に契約違反で解雇

ドライバーに「ギルギットに戻る」と言うと、分かったのかニヤッとした。ケイジは盛んに“Why?”と聞くが“None of your business!, my way”。6時間でギルギット、PTDCホテルでケイジに1時間後に来るように命じ、その間にイスラマバードのシルク・ロード社に電話する。督永女史は不在だが娘さんがいたので手短に顛末を話し、追ってFaxするからそれまで一切を凍結し、問題があれば戻ってから解決する旨伝え、了解を得た。ホテルに新ガイドを依頼、翌日候補者と面談する手配をする。

少し遅れてケイジが庭に現れた。「このトレックは今日で終りにした。従ってイスラマバードに

▼フンザにて、飛田君、ケイジ君と



帰ってよろしい。会社に電話してApproval（了解）を得た」と言い渡す。盛んに何故かと聞くので「君は最早会社の代表ではないから話す必要はない。サーブが決めたのだ。あとは直接督永女史との間で処理する。総ては終わった」と言うのと、「理由を書いてくれ」と言うので「理由は書いて会社に直接送るが、“Violation of the Contract”（契約違反）だ」、パキ英語の話し言葉の早い彼も分からなそうな顔をするので“Agreement, Assignement, Promise”と思い出せる単語をいくつか並べると分かったのか、ホテルに入って行った。会社に電話をしていたらしい。パキスタンでは、神頼みの緩い人間関係の中でも大事な事は契約してキチッと守る、と読んだ事があるが一体どうなっているのか。ともあれ一件落着、チトラルへの道のやり直しだ。

●新ガイドはインテリ

21歳、大学出たてというローカル・ガイドのアサド君がコックを連れてやってきた。条件は“ガイド兼コック、英語で話せる事、約束を守る事、自分のテント持参”であり、テント以外はクリアしていて、賃金は2人で1人分でよいと言う。若くヨーロッパ人のマスク、それにインテリっぽいのが気に入って雇うことにした。1日（2人で）450Rs（¥1,170）、解雇したケイジは\$30（¥2,7

00) だからその4割強に過ぎない。これもホテル払いにしてトラブルある時にはホテルを経由する事にした。

NAPWDオフィスで政府レストハウスの許可証を申請したが5ヵ所希望の内ヤスィーン1ヵ所だけ。この道沿いにはロクな宿がない上にキャンプ適所も乏しく、ガイド達のためにももっと欲しかったのだが、シャンドール峠付近の橋が決壊して通れず、皆レストハウスに溜っているのだそうだ。

(2)キズール川に沿って

●美わしの、雨のヤスィーン

再出発。グピスでは同じくテント、翌日は雨の中、広い緑のヤスィーン川を、レストハウスに向かう。ヤスィーンはしっとりした町で久しぶりにくつろぐ。川の分岐の西はシャハーン・ドク山群へ抜ける峠道で、オープン間もない89年に、H A J ミニヤコンカ隊で'94年に遭難死した福沢君(登攀隊長)や渡辺君など北大WV部OB隊が、二つのピークに初登頂した後下ってきた道だ。正面は、美しいヤスィーン渓谷を詰め、タルコット湖(村)&峠からコーヨーゾムを仰ぐ、目指すコースである。雨の合間をみてアサド君と百年前のミールの城を訪問、その一部である裁判所では判事が来てくれて法廷の模様を話してくれた。いとも簡単そうなパキスタン風の判決に思えた。翌日も夜通し降った雨が止まず、タルコット行きは諦めてヤスィーンに別れを告げる。いつか、また来るさ。峠の橋は復旧したと聞いたので、ギズール川(ギルギット・ウエイ)に出て一旦グピスへ戻り、ギルギット州副行政技官(AEE)のオフィスへ寄ってパンダー、テルーのレストハウスの許可証を貰う事にした。何と先日、RHの庭で話したお役人であった。日本ではオウム・カルトがジャンボ機ハイジャック事件を起こしたらしい、と話してくれた。

●パフシェタル・ゴルへ

大きなハルティ湖沿いに走り、パフシェタルへの分岐の村シャマラーンを過ぎるとパンダー(ル)村。レストハウスは既に満室で、向かいのロッジ(ホテル)に泊まる。ここなら泊まれる。この村は広々とした若緑が萌え、ロッジから見る黄昏の山陰は幻想的である。アサド君にシャマラーンに

▼ギルギットの郊外



下りて貰い、明日のパフシェタルの情報を調べて貰う事になると、村人を2人連れてきた。セキュリティは問題なく、増水も大丈夫のようだ。1人は川の少し奥の出身で、ガイド&ポーターに雇ってくれと言う。120Rs(¥300)で雇う。

翌日、分岐でジープを捨ててゴルに入る。ザガール・アン(パス)を正面に、夏なら花一杯の、気持ちの良い沢となり、5時間でやっと人家、ポーターの父が住む実家、ガシュットである。ここから3時間も行くとハリンガル・シャールが見えると言うので昼食を済ませて奥を目指す。このゴルの目当てはホログジット・ゴル、少なくともジュパル・ゴルまで足を伸ばしてシャハーン・ドクを仰ぐ事であるが、この日は草原に夏のカルカのある気持ちの良い原っぱでテント、と決めた。が、どうした事だろう、一陣の風が荒れ狂う風と叩き付ける雨を呼んだ。テントは飛ばされそうになり、しばし草薺きのカルカに身を潜めていたが鎮まらず、諦めてガシュットまで強引に戻った。実家の家は小高い上にあるが、ボクは河原の広い草地にキャンプ、緊急時は笛で呼ぶ事にした。ポーター君やその弟が側で野宿すると言うが、断った。

父の名はエフティバル・シャー・チュムレといい「3〜4年前までよく来ていた日本人がいたが、来なくなった」「サブロウ・ヒロシマか」「そうだ、そうだ。病気か? 生きているか?」「元気だよ。最近はこのずーと北の、国境近くのオープンエリアを歩いているが、また戻ってくるよ」

夜は寒いが満点の星空が美しかった。が、翌日

は朝から小雨となる。ツイてないなあ、ギズールは！パフシェタル・ゴルはヒンズー・ラジで最も美しい沢だと言うし、北大WVのスライドでヤスィーンと共にそのピースフルな絵に驚嘆した。あと3日もあれば堪能出来るのだが…。

パンダーへ引き揚げ、夜はパンダー・レイクで釣れたマスの肴で慰めた。

●シャンドール・パスを越えて

翌6/25、ジープは広々とした大草原に至る。外国人お年寄りトレッカー10人ほどが歩いている。ギルギットの外れで見たからチトラルまで歩くのだろう。やがてシャンドール・パスの草原とヤクと湖、3,700mのアルプに着く。奥の湖に軍の宿舎とヘリポートがあり、緊急時には多くの兵士と武器を補強するのに使うと言う。ブット首相も陣中見舞いに来てくれたと誇らしげに語っていた。宿舎からジープで3～4分の湖サイドにテント、食事は宿舎を借り、往復することにした。

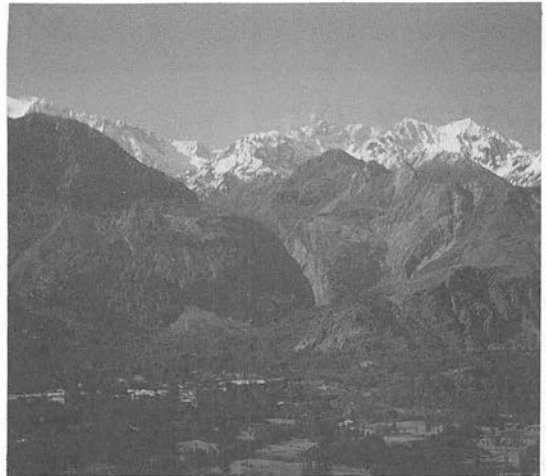
夕方、軍宿舎の方で突然数発の鉄砲の音と嬌声が聞こえた。テントから覗くと2～3台のジープから鉄砲を持ったのやら十数人が兵舎へ近付いている！十分ほどでジープに引き揚げ、再び嬌声をあげながら僕のテントに近付いてくる！しかし側の道を通って去って行った。何事か！あとで聞くと結婚のお祝の訪問なのだそう。人騒がせな！

夜、湖を囲む雪斑の連山から凍った雨風が吹き下ろして、ひどく寒い夜となり、テントは白く凍った。チトラルに至るには東のこのシャンドール・パス(3,700m)か南のロワライ・パス(3,200m)のいずれかを越えなければならず、春秋は不通の難所とされている。

●ブニへの道すがら

この峠の西側の山肌にペンキで“Welcome to SP, Chitral Scout”とありチトラル州に入った事を示す。やがてUの字型に北上しながらブニ・ゾム山群を巻く。この時、対面から来た満員のジープと出くわし、双方が譲れ譲らぬでドライバー同士が崖っぷちの路上で言い争い、突然相手のドライバーは脱いだスリッパでヒッパタキだした。皆で止めたが、こちらのドライバーは頭にきて“ポリスを呼んで来る”とキーを持ったまま一人で歩きだした。2時間もかかるとの事でアサド君が追っ

▼ブニ・ゾム山群



て説得したが無駄。今度は先方のドライバーが追いだしたのでこれはボクが宥めて止めた。キーを手に入れて決着がつくまで約2時間。こちらのドライバーはイスラマバード・ドライバー、相手はローカル・ドライバーなので一寸威張って見せたい。先方は農産物と人が一杯、こちらは避ける余裕があったのだから。

マスツージは見掛け倒しの貧村だがティリチミールが僅かに見える。ここから西のブニまで行く道は豪壮なブニ・ゾム山群のすぐ北を通る素晴らしい道だ。8月、北大隊が登る計画だが手ごわそう。今日はブニに泊り、チトラルはお預けにして、明日から北上しティリチミールに接近する事にしよう、せっかく来たのだから。(タイ製のカメラには説明書がなく、フィルムの装填ミスで、ブニまでの2本分は写真がない！)

—— 速報：ムスターグ・アタ隊登頂 ——

H A J が中国領パミールに派遣したムスターグ・アタ(7,546m)登山隊は、8月13日と17日の両日にわたり5名が登頂して、20日無事カシュガルに下山した。

同登山隊は、7月24日カシュガルを出発し、28日BCを建設。西稜ルートに入り8月1日C1、6日C2、12日C3をそれぞれ設け、13日に中川裕隊長と品川幸彦隊員が登頂。17日にも石川龍彦副隊長と佐藤英樹、北條治男両隊員が登頂した。

尚、品川隊員はこの登頂によって天山、パミールの7千m峰に6座7度登頂する快挙となった。

地域ニュース

《パキスタン》

ディラン新ルートから登頂

バーバリアンクラブ隊（岩崎洋隊長(36)ら2名）は、7月8日南面ヒナルチュラ氷河の3,480m地点にBC建設、10日ABCを4,500m地点に出し21日西稜に出た5,800m地点でビバーク。22日6,350m地点でビバークし翌日アタックするもブリザードのため6,500m地点から引き返す。

24日6,350m地点から再びアタックに向い14時5分隊長と鈴木正典隊員（36）が登頂に成功した。

ディランの通常ルートは、北面から西稜を経るものと北稜がある。今回は南面からの新ルートとなった。尚、これにより岩崎隊長は、マモストン・カンリ、カルジャン、ピラミッド・ピークの3座の初登頂を含め、ティリッチ・ミール、サトパントに次いで6座目の7千メートル峰登頂となった。

一方、同じく南面から挑戦していた山梨県山岳連盟隊（青木茂(41)ら8名）は、7月13日ヒナルチュラ氷河3,400mにBC建設。29日C3建設し、31日にアタックを行ったが強風のため6,700m地点で登頂を断念した。同隊によれば今年は50年に一度という異常気象により、降雪量多く連日雪崩・落石が発生。晴れの日が11日間と少なく、標高4,500m上は常に降雪であった。

ウルタルⅡの明暗

先号で紹介した日本山岳会東海支部隊は、初登頂に成功した後、下山中悪天候に遭い、上部で停滞を余儀され、20日C1（5,500m）に戻ったが、22日朝になって山崎彰人隊長（28）が死亡した。

一方、南稜から登頂を目指していたカトマンズ・クラブ隊（高橋堅隊長(37)ら6名）は、7月31日全員登頂に成功した。登頂したのは、隊長と堤信夫(45)、安藤昌之(40)、斎藤渉(39)、星野龍史(28)、成田俊夫(44)の隊員。

K2に無酸素登頂

K2の単独登頂を目指していた戸高雅史(34)はイタリア隊の4名に同行し7月29日午後4時20分南東稜から無酸素で登頂した。日本人で南東稜からの無酸素登頂に成功したのは、1985年HAJ隊の山田昇に次いで2人目。

尚、中国側の北稜からは、1982年日山協隊の坂下直枝、柳沢幸弘、高見和成、川村晴一、重野太肚二、禿康信の6名が無酸素登頂に成功している。

キンヤン・キッシュ登頂断念

キンヤン・キッシュに北稜から登頂を目指していた同人パハール隊（飛田和夫隊長ら6名）は、雪崩のため装備を失ったことや悪天候などのため、5,800mで登頂を断念して下山した。

《中国》

哈巴雪山初登頂

中国雲南省中甸県にある哈巴雪山（5,396m）が、昨10月4日に雲南登山協会隊によって初登頂された。

ジン・フェビアオに率いられた17名は、9月29日昆明を出発。30日中甸県の橋頭着。営林署と入山の交渉を行うが多量の降雪があり、クレバスやガリーには雪が多く危険な状況との情報。馬の手配を行い2000元を預ける。夕方5時15分キャラバンを開始して8時5分2,260mのダンボ村到着。

10月1日8時馬17頭で出発。13時森林帯を抜けて3,320mに到着。午後6時4,100mにBC建設。

2日ルート偵察。3日4,900mにC1建設。4日C1を5,200m地点に移す。15時14分4名が初登頂。測量の結果5,424mを示した。5日C1撤収しBCに下るが行方不明者や重傷者が出て手間どった。10月7日湖などの調査を行い8日下山。

AACKが梅里雪山へ

1991年正月、日中合わせて17人が遭難した雲南省の梅里雪山（6,740m）へ京都大学学士山岳会（AACK）が、雲南省体育運動委員会と合同して、登頂を目指すことになった。

計画では、斎藤惇生総隊長ら日本側は11名で、

登山隊は7名。11月10日に東面3,600m地点にベース・キャンプを設け、前回と同じルートを登路とする予定。

中村保氏、梅里雪山巡礼へ

「ヒマラヤの東」の著者である中村保氏が、メコン川とサウルィン川に挟まれた梅里雪山を一周する巡礼の旅へ出発する。

計画によれば10月上旬に出発し、一周にかかる日数は約2週間。南面から西面にかけては、サルウィン川の西にある「独龍江」を見る機会があるかも知れない。

《ネパール》

石川富康氏、5座目へ出発

50才を超えてから八千メートル峰に挑戦し続け、既にチョー・オユー、サガルマータ、ダウラギリI、シシャバンマCと4座の登頂を果している、東海の否日本の星、石川富康氏が5座目の登頂を目指してマナスルへ出発した。

計画によると登稜会隊へ参加。石川氏は小西政継氏と2人でカトマンズ以後別動隊として独自に行動するもの。

9月1日にBC入りし、9月末頃までに登頂を終え10月中旬帰国予定。

ヒマラヤから

キンヤン頼リ

お変わりなくお越しの事と思います。キンヤン・キッシュ登山隊の様子をご連絡します。

6月22日イスラマバード〜ベシヤム 23日アリアバード 24日買出し 25日ジープ5台でナガール 26日梱包作業 27日ポーター56名でフロー 28日ヒスパー村 29日フロリンチッシュ(3,150m) 30日雨で停滞 7月1日ブラルン(4,050m) 2日ブルンバリという地名の所にBC(4,300m)建設。

ブラルンサールの南に位置する岩峰のすそのがクンヤン氷河に張出している小高い丘状で土の上に草花が咲き、南東方面にはクンヤン氷河をはさ

んで目標のキンヤン・キッシュの北西面が望める快適な所です。

6日より登山活動に入り、昨日(9日)C1予定地5,300mを確認して来ました。6日より快晴が続いています。安全を第一に頑張っています。隊員6名元気にやっております。

1996. 7. 10 BCにて

飛田和夫

ムスターグ・アタ便り

你好! サマーキャンプは順調に進んでおります。本日(7月30日)Aパーティ(中川、北條、品川)はC1往復。ロバによる荷上げも終了しました。

ムスターグ・アタのBCは、現在10隊以上60名以上の外国人と20名以上の中国人がおり、BC、C1は大キジだらけです。4日間続いた好天も下り気味です。

1996. 7. 30 BCにて

中川 裕

ヌン便り

心配した隊荷も無事先登隊の努力によって通しました。計画もデリー〜レーとスムーズにいきます。明日なつかしいカルギルにむかって出発します。いろいろありがとうございました。

1996. 7. 27 レーにて

長 繁夫

KR4便り

日本では暑い夏が続いていることと思います。私たち栃木県庁谷峰会はHAJのお世話や御指導によりKR4峰登山のため何とか28日にデリーに入ることができました。

ビザや通関等は何とかクリアできました。これもインドヒマラヤ会議等へ出席させていただいた結果と考え、感謝しております。

今後、キャラバンや登山活動を開始し、その成果を御報告できればと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

1996. 7. 30 ニューデリーにて

上杉純夫

ウルタルII便り

アッサラマ・アレクン!

お陰様で7月31日午前8時10分。ウルタルⅡ峰
7,388mの頂きに立つことができました。BC入
りして丁度50日。共に闘った仲間5人と抱き合っ
たときの心境は忘れられません。

皆様有難うございました。

1996. 7. 31

星野龍史

Books

白き贈物

会津山岳会がインドのガングスタン(6,162m)
に派遣した女性登山隊の報告書。女性だけのヒマ
ラヤ初見参の登山隊らしく、各係ともきめ細かく
報告されている。随所にある写真もこの手の報告
書としては実によく印刷されている。登頂写真や
周辺の山々のパノラマがないのが惜まれる。

B 5 版 90頁 表紙と裏表紙にカラー使用

〒965 会津若松市大町 2-10-13 外島米店内

地平線の旅人たち

1979年8月に「日本人の旅を見直せないか」と
の声にこたえて「地平線会議」が発足した。毎月一
回「報告会」を開きながら年報の発行や月報の発
行などを通して、日本人の探検・冒険・旅などの
分野を網羅しようと務めてきた。

その報告会が200回を終えたところで、報告者
からのアンケートにもとづいてまとめられたのが
本書である。

1979年から96年までの28年間の報告書が200冊
を寄せているが、ヒマラヤに関連するものはその
うち約25%を占めている。

人間の知的興味は尽きることがない。その意味
では様々なジャンルの行為が収録されている本書
は老若男女を問わず楽しみながら読める。

A 5 版 294頁 窓社刊 2,200円

エプロンはずして夢の山

田部井淳子さんの半生記がコンパクトにまとめ
られた本。若き日に誰もがもつグイグイと岩登り
に引きずり込まれて行く様が素直に描かれている。
そして誰もが味う友の遭難。

ヒマラヤ登山では、エヴェレストのローツェ・
フエースの固定ロープをユマールなしで登るとこ
ろがすごい。20年たった今でもその苦しさを忘れ
ないという。

初心を忘れずに今後の活躍を期待したい。

A 5 版 203頁 カラー 8頁 1,650円

東京新聞出版局 1996年6月刊

中国登山の手引き(第4版)

第3版が好評のうちに完売したのを機に、徴収
費用の金額1996年度版などを新しくして大幅に増
ページして発刊された。尚、この手引きは新しい
情報を取り入れて利用者の便に供するため毎回百
部しか発行されない。

B 5 版 300頁 3,800円(送料400円)

〒170 東京都豊島区東池袋 4-2-7

萬栄ビル501号 日本ヒマラヤ協会

山岳文献目録1996

富山県「立山博物館」に収蔵されている「山岳
文献」の目録である。その中心になっているのは
加茂整氏の蔵書と、諏訪多米蔵氏の蔵書である。

第一部は諏訪多米蔵目録で全部で1275点2687冊
が整理されており、「和書」の部はヒマラヤ、山
岳書一般、アジア地方一般、民俗・考古・その他
に分かれている。その他邦訳書、洋書、和雑誌、
洋雑誌に区分されている。

ヒマラヤの部には250冊、洋書の部には411冊が
リストアップされている。

B 5 版 115頁

〒930-14 中祈川郡立山町芦峯寺93-1

東京集会のお知らせ

日 時 9月30日(月) 午後7時

ムスターグ・アタ隊とヤンラ・カンリ偵察隊の
報告を行います。会費は1000円。

場 所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下
車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早
稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前
方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

八千メートル峰 日本隊挑戦の概要

(1952～1995＝44年間)
エヴェレスト (8,848m)
 (1969～1995)

年	ネパール					中国					合計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1969	日本山岳会(1)	4	—	0	偵察							—	0
"	" (2)	12	—	0	"							—	0
"	スキー隊	12	—	0	"						28	—	0
1970	日本山岳会	39	3	1	成田潔思()								
"	スキー隊	14	—	0							53	3	1
1971	国際南西壁隊	2	0	0							2	0	0
1973	R C C II	48	2	0							48	2	0
1975	女子登攀クラブ	20	1	0							20	1	0
1979						日本山岳会	9	—	0	偵察	9	—	0
1980	植村冬期隊	17	0	1	竹中昇	日本山岳会	39	3	1	宇部明	56	3	1
1981	明治大学	20	0	0							20	0	0
1982	イエティ冬期隊	9	1	2	加藤・小林						9	1	2
1983	山学同志会	8	2	0		カモシカ冬期隊	17	0	0				
"	イエティ同人	5	3	2	吉野・禿								
"	カモシカ冬期隊	10	3	0							40	8	2
1985	植村直己撮影隊	11	7	0		ウータンクラブ	11	0	1	石井慎一			
"						カモシカ冬期隊	9	0	0		31	7	1
1986	高所研究所	6	0	0							6	0	0
1987						防衛大学	24	0	1	横山正夫			
"						ウータン冬期隊	4	0	0		28	0	1
1988	日本山岳会	34	0	1	水腰英隆	日本山岳会	64	5	0				
						ウータン冬期隊	5	0	0		103	5	1
1989	カトマンズC	24	3	0		日本ヒマラヤ協会	9	0	0		33	3	0
1990	日本／韓国	3	0	0							3	0	0
1991	G登攀クラブ	8	0	0		明治大学	10	0	0				
"	群馬県冬期隊	16	0	0		貫田／二上	2	2	1	二上純一	36	2	1
1992						日本／カザフ	11	0	1	星学	11	0	1
1993	群馬県冬期隊	9	6	0							9	6	0
1994	愛知学院大学	11	3	0									
"	宮原／貫田	2	1	0							13	4	0
1995						日本大学	31	2	0		31	2	0
合 計		344	35	7			245	12	5		589	47	12

(注) ネパール側24隊344人中、5 隊 7 人死亡、死亡率2.0%。中国側14隊245人中、5 隊 5 人死亡、死亡率2.0%。合計38隊589人中、10隊12人死亡、死亡率2.0%。

K 2 (8,611m)

(1975～1995)

年	パキスタン (K 2)					中 国 (チョゴリ)					合 計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1975	日本山岳協会	5	—	0	偵察						5	—	0
1976	日本山岳協会	7		0	〃						7	—	0
1977	日本山岳協会	46	6	0							46	6	0
1981	早稲田大学	13	1	0		日本山岳協会	5	—	0	偵察	18	1	0
1982						日本山岳協会	49	7	2	柳沢・坂野	49	7	2
1985	日本ヒマラヤ協会	16	3	0							16	3	0
1987	高山研究所	10	0	0									
〃	東洋大学	12	0	1	鈴木章						22	0	1
1990						横浜山岳協会	12	2	0		12	2	0
1994	日本教員	7	0	0									
〃	小西	4	0	0							11	0	0
合 計		120	10	1			66	9	2		186	19	3

(注) パキスタン側 9 隊120人中、1 隊 1 人死亡、死亡率0.8%。中国側 3 隊66人中、1 隊 2 人死亡、死亡率3.0%。合計12隊186人中、2 隊 3 人死亡、死亡率1.6%。

カンチェンジュンガ (8,586m)

(1980～1995)

年	ネ パ ー ル					イ ン ド					合 計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1980	山学同志会	9	6	0									
〃	日本ヒマラヤ協会	7	—	0	偵察						16	6	0
1981	日本ヒマラヤ協会	22	5	0	縦走計画						22	5	0
1984	日本山岳会	37	3	0	縦走計画						37	3	0
1988	ヒマラヤ同人	3	1	0							3	1	0
1991						日本ヒマラヤ協会	14	2	0	合同隊	14	2	0
1995	ガイア	4	0	0							4	0	0
合 計		82	15	0			14	2	0		96	17	0

ローツェ (8,516m)

(1973～1995)

年	ネ パ ー ル					中 国					合 計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1973	神奈川山岳連盟	9	0	0							9	0	0
1976	神奈川山岳連盟	18	0	0							18	0	0
1983	カモシカ同人	8	7	0							8	7	0
1986	ヒマラヤ同人	5	2	0							5	2	0
合 計		40	9	0							40	9	0

マカルー (8,463m)
(1969～1995)

年	ネパール					中国					合計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1969	日本山岳会・東海	5	—	0	偵察						5	—	0
1970	日本山岳会・東海	18	2	0							18	2	0
1982	山学同志会	5	3	0							5	3	0
1983	ベルニナ山岳会	4	0	0							4	0	0
1985	電々山岳同志会	7	0	0							7	0	0
1986	カモシカ冬期隊	2	0	0							2	0	0
1990	高山研究所	2	1	0									0
"	カトマンズC	1	0	0									
"	昭和山岳会	2	0	0							5	1	0
1991	ベルニナ山岳会	6	5	1	石坂工						6	5	1
1992	雪豹クラブ	4	0	0							4	0	0
1995						日本山岳会	14	8	0		14	8	0
合 計		56	11	1			14	8	0		70	19	1

(注) ネパール側11隊56人中、1隊1人死亡、死亡率1.8%。中国側死亡率0。合計12隊70人中、1隊1名死亡、死亡率1.4%。

チョー・オユー (8,201m)
(1981～1995)

年	ネパール					中国					合計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備考	人数	登頂	死亡
1981	日本勤労者連盟	29	0	0							29	0	0
1983	福岡登山研究会	11	0	0							11	0	0
1985	カトマンズC	4	3	0	中国側登頂						4	3	0
1986	北九州同人	2	1	0	"						2	1	0
1987						カモシカ同人	10	8	0		10	8	0
1988						日本ヒマラヤ協会	4	4	0		4	4	0
1990						学習院大学	13	2	0				
"						RCCⅡ	8	0	0		21	2	0
1991						シルバータートル	13	4	0		13	4	0
1992						カトマンズC	15	11	0		15	11	0
1993						阿部	3	0	0				
"						群馬県山岳連盟	12	12	0		15	12	0
1994						山野井	3	3	0				
"						日本大学	8	4	0				
"						北見山岳会	8	0	0		19	7	0
1995						小西／山本	2	2	0				
"						秋田県	13	5	0				
"						法政大学	8	5	0		23	12	0
合 計		46	4	0			120	60	0		166	64	0

ガッシャーブルム I (8,068m)
(1981～1995)

年	パキスタン					中 国					合 計		
	派遣母体	人数	登頂	死亡	備 考	派遣母体	人数	登頂	死亡	備 考	人数	登頂	死亡
1981	長野県山岳協会	12	2	0							12	2	0
1986	登歩渓流会	3	2	0							3	2	0
1989	高山研究所	4	2	0		横浜山岳協会	2	—	0	偵察			
"						宮城県山岳連盟	12	0	0		18	2	0
1990	岡山大学	12	2	0									
"	J F M A	5	0	0							17	2	0
1992	早稲田クラブ	5	0	0									
"	小西／戸高	2	0	0							7	0	0
1993	雲表クラブ	5	0	0									
1994	富山県山岳連盟	13	3	0							18	3	0
合 計		61	11	0			14	0	0		75	11	0

ダウラギリ I (8,167m)
(1970～1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備 考
1970	同志社大学	15	1	0	
1975	東京都山岳連盟	17	0	2	沼尾・井村
1977	関西	13	0	0	
1978	イエティ同人	13	5	1	永沼勝己
"	群馬県山岳連盟	18	5	4	阿久津・深沢・小林・小暮
1981	高山研究所	2	1	0	
1982	カモシカ同人	18	3	0	
"	高松勤労山岳連盟	5	2	0	
"	北海道大学冬期隊	14	1	0	
1983	ウータンクラブ	14	0	0	
1984	イエティ同人冬期	3	0	0	
1987	グルブドモレーヌ	10	0	0	
"	アウトドアーズ	2	0	0	
1988	青と白同人	3	0	0	
"	カトマンズクラブ	6	0	0	
1990	女子登攀クラブ	4	2	0	
1991	イエティ同人	5	0	0	
"	昭和山岳会	9	2	0	
1992	もりおか山の会	4	0	0	
1993	ベルニナ山岳会	6	2	0	
"	長野県山岳協会	6	1	0	

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備 考
1994	山童子	3	1	0	
"	シルバータートル	7	5	0	
1995	雪豹同人	5	4	0	
"	チーム84	7	2	1	俵谷久義
"	宮崎大学	11	2	0	
合 計		220	39	8	

(注) 26隊220人中、3 隊 8 人死亡、死亡率3.6%。

シシャパンマ M (8,027m)
(1980～1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備 考
1980	女子登攀クラブ	4	—	0	偵察
1981	女子登攀クラブ	9	1	0	
1982	高所研究所	7	0	0	(6)
1988	日本ヒマラヤ協会	4	3	0	
1989	愛知学院大学	25	3	0	
1990	京都大学学士山岳	33	0	0	(15)
1991	長野県山岳協会	14	0	2	五味・宮下
"	立正大学	10	0	0	(2)
1992	福岡	4	0	0	(2)
"	カトマンズクラブ	14	0	0	
1994	雪豹同人	8	0	0	(6)
1995	Y M S	7	0	0	(4)
合 計		139	7	2	(35)

(注) 12隊139人中、1 隊 2 人死亡、死亡率1.4%。
備考欄の数字は中央峰(8,008m)に登頂した人数。

マナスル (8,163m)

(1952~1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1952	日本山岳会	6	—	0	偵察
1953	日本山岳会	15	0	0	
1955	日本山岳会	3	0	0	偵察
1956	日本山岳会	12	3	0	
1971	東京都山岳連盟	12	2	0	
1972	韓国	1	0	1	安久一成
1974	ユングフラウ	11	3	1	鈴木貞子
1976	長野県山岳協会	10	1	0	合同隊
1978	イエティ同人	3	0	0	
1981	イエティ同人	4	3	0	
1982	日本ヒマラヤ冬期	10	0	1	佐久間隆
1985	青森県	9	0	0	
"	イエティ同人	7	0	0	
"	カモシカ同人冬期	2	2	0	
1987	青森県山岳連盟	14	0	1	工藤一義
1988	弘前大学	2	0	0	
1989	ヒマラヤ同人	4	0	0	
1995	カトマンズクラブ	9	0	0	
合 計		134	14	4	

(注) 18隊134人中、4 隊 4 人死亡、死亡率3.0%。

ナンガ・パルバット (8,125m)

(1976~1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1976	福岡大学	9	0	0	
1981	山学同志会	4	0	0	
1983	登歩渓流会	10	0	1	志村一夫
"	福岡登高会	17	0	3	山田・飯田・高森
"	富山県山岳連盟	14	2	0	
"	川崎市教員	5	0	0	
1984	ウータンクラブ	4	0	0	
"	日本ヒマラヤ協会	4	0	4	角田・今給黎 肥田・小暮
"	京都岳人クラブ	10	0	0	
"	ウータンクラブ	5	0	0	
"	山学同志会冬期隊	9	0	1	瓶田裕己
1985	高所研究所	4	0	0	
"	福岡大学	14	2	0	
"	札幌山岳会	7	0	0	

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1986	サンナビキ	7	0	0	
1987	川崎市教員	7	2	0	
"	アウトドアーズ	5	0	0	
1988	高山研究所	3	2	0	
1989	東京農業大学	15	0	1	馬場哲也
1990	川崎市教員	9	1	1	中島修
"	バイネニアソブ	4	1	0	
1991	サンナビキ	8	0	0	
1993	日本教員	8	1	0	
1995	千葉工業大学	10	3	0	
"	日本教員	6	0	0	
合 計		198	14	11	

(注) 25隊198人中、6 隊11人死亡、死亡率5.6%。

アンナプルナ I (8,091m)

(1972~1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1972	日本山岳会・信濃	3	—	0	偵察
1973	日本山岳会・信濃	11	0	4	高橋・浜・片桐・牛越
1979	静岡県山岳連盟	12	1	0	
1980	山学同志会	1	0	0	
1981	山学同志会冬期隊	1	0	0	
"	イエティ同人	12	2	1	加藤康二
1984	東京志岳会	4	0	0	
"	武川	5	0	0	合同隊
"	岩遊会	6	0	0	
"	群馬県山岳冬期隊	15	0	0	
1987	カモシカ同人冬期	4	0	0	
"	群馬県山岳冬期隊	14	4	2	斎藤・小林
1988	どんぐり山の会	8	0	1	森明彦
1991	北海道中央勤労者	11	0	0	
1994	江北大山の会	5	0	0	
合 計		115	7	10	

(注) 16隊115人中、4 隊10人死亡、死亡率8.7%。

ブロード・ピーク M (8,047m)

(1977~1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1977	愛知学院大学	12	3	0	
1985	関西	8	6	0	
1988	昭和山岳会	5	4	0	

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1989	富山県山岳連盟	13	2	0	
	川崎市教員	8	0	0	
1991	イエティ同人	4	0	0	
〃	東京農業大学	6	5	0	
〃	バイネ／東京スキ	8	5	0	
1993	わらじの仲間	9	2	0	
〃	東海山岳会	7	5	0	
1995	F O S	4	3	0	
合 計		84	35	0	

ガッシャーブルムⅡ (8,035m) (1976～1995)

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1976	登攀倶楽部	13	0	3	宮本・平松 松村
1980	ベルニナ山岳会	8	3	0	
1985	フランス	1	0	1	中野融
〃	横浜蝸牛山岳会	4	3	0	
1988	女子登攀クラブ	11	5	0	
1990	イエティ同人	4	4	0	

年	派遣母体名	人数	登頂	死亡	備考
1995	B S R	5	0	0	
合 計		57	25	4	

(注) 7 隊57人中、2 隊4 人死亡、死亡率7.0%。

山 名	標高	入山	登頂・率%	死亡・率%
1.ヴェレスト	8848	589	47 8.0	12 2.0
2.K 2	8611	186	19 10.0	3 1.6
3.カンチェンジュンガ	8586	96	17 17.7	0 0
4.ローツェ	8516	40	9 22.5	0 0
5.マカルー	8463	70	19 27.1	1 1.4
6.チョー・オユー	8201	166	64 38.6	0 0
7.ダウラギリ I	8167	220	39 17.7	8 3.6
8.マナスル	8163	134	14 10.4	4 3.0
9.ナンガ・パルバット	8125	198	14 7.0	11 5.6
10.アンナプルナ I	8091	115	7 6.1	10 8.7
11.ガッシャーブルム I	8068	75	11 14.7	0 0
12.ブロード・ピーク M	8047	84	35 41.7	0 0
13.ガッシャーブルム II	8035	57	25 43.9	4 7.0
14.シシャバンマ M	8027	139	7 5.0	2 1.4
合 計		2169	327 15.1	55 2.5

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキー
タイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう
山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合/山スキー・フリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、
照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山
雪稜・新緑そして花の山
- 6月号 北海道の山と人
日高、大雪、知床をめぐる
- 7月号★読者がつくる夏山プラン
ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅
地図で探したとっておきの池瀧
- 9月号 私の好きな山小屋
近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう
撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅
徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない
(入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号「僕でも登れる？」
——冬のハケ岳を楽しむ
- 2月号「僕でも登れる？」
——アイスクライミングに挑戦
- 3月号「僕でも登れる？」
——尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号「僕でも登れる？」
——これぞ岳人！春雪の西穂高
岳へ(12回完結)
- 5月号「アルプス・ツェルマット研究」
- 6月号「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号「ドロマテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号「南米ロライマ山にロストワ
ールドを訪ねる」
- 10月号「ニュージーランド——手付か
ずの自然を楽しむ」
- 11月号「海外トレックの王道・エベ
レスト街道に行く」
- 12月号「冬の北米、アウトドアライフ
最新事情」

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

5-5 チェルーション (雀兒山・Cholashan)

- * 山脈：横断山脈。
- * 位置：成都(505m)の北西約490km。徳格の東47km [31° 8' N, 99° 1' E]
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都までは北京から飛行機で2時間の旅。東京を午前の早い便で飛び立てばその日の内に成都に着くことができる。成都から雅安、二郎山(3437m)を越えて康定(2615m)に一日で入れるが、現在このルートは工事のため、石棉経由で康定を経てチベット高原に登り、新都橋を経て北上し川蔵北路に入り甘孜から新路海までジープで4日。さらにヤクで新路海南岸のBC(3800)へ到着する。
- * ルートの所要日数：1989年秋に初登頂した日中合同隊は北面から入り、BC設営後2週間で初登頂した。
- * 山の概念：主峰6168m。北西約5kmにII峰(6119m)がある。その他周辺には幾つもの峰があり連峰となっている。
- * 通常の登山時期：春と秋のシーズン。
- * 山名：チベット語で「聖なる山」の意。
- * 小史：1962年に北京地質学院隊が入山、失敗。
- * 参考文献：ヒマラヤの東(中村保) [山と溪谷社 1996年3月刊]

登山の概要

■主峰 (6168m)

1986年

4月 偵察 日中合同隊

秋の本隊の偵察のため入山。北面を中心に3週間偵察。アイスフォールを越えた。

「中国側隊長：朱発栄ら6名。日本側隊長：北口博教ら3名」

9月 北面 日中合同隊

神戸大学と中国地質大学の合同登山隊が、初登頂を目指して入山。9月11日3800m地点にBC設営。上部氷河の台地状雪原の4500m地点にC1を設営。19日5200mにC2を設営。24日北口、船原、竹内、杉本、董范、張志堅、張偉、鄭超の8名が12時50分初登頂に成功。またACから川端、馬新祥、孟憲国、張軍も登頂した。次いで翌日には武智、堀の両名も登頂した。

「総隊長：胡燕生(52) 中国側隊長：朱発栄(53) 孟憲国(26) 董范(27) 劉亜非(32) 張志堅(25) 馬新祥(25) 張軍(30) 鄭超(30) 張偉(23) 曹文華(f 21)」

「日本側隊長：北口博教(43) 船原尚武(27) 川端充(22) 竹内鉄二(21) 武智大介(21) 堀洋(22) 杉本直子(21)」

[チェルーション初登頂(神戸大学・中国地質大学合同登山隊) 山岳第84年 1989年12月刊]

5-6 スークニャン (四姑娘山・Siquuniang)

- * 山脈：横断山脈。邛峽山脈最高峰。
- * 位置：成都(505m)の西北西約127km。理県の南南西約53km。[31° 1' N, 102° 9' E]
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都までは北京から飛行機で2時間の旅。東京を午前の早い便で飛び立てばその日の内に成都に着くことができる。成都から北北西に向かい灌県を経て汶川から西に折れ理県に到る。ここからパンダの観察センターの

ある臥竜を経て巴郎峠(4487m)を越えて日隆(3150m)までは約230km、成都からジープで一日行程である。西面のベース・キャンプ地までは馬やヤクで半日行程。

- * ルートの所要日数：主峰を南東稜から初登頂した同志社大学隊はBC設営後16日間で登頂。

- * 山の概念：主峰6250m。三姑娘山5355m。二姑娘山5276m。太姑娘山5025mがある。また、周辺にはチャンピンコーを挟んだ東側に鋭

鋒ブニュー(5413m)などの岩場がある。

* 通常の登山時期：夏と秋のシーズン。

* 山名：主峰には別名としてルオサンがあるが、伝説の四人姉妹の末娘の名前。四姑娘山はこの伝説の主人公である四人姉妹を意味する。チベット族は、シグラロウダ（大いなる神の山）とも呼ぶ。

* 小史：なし。

* 参考文献：四姑娘山・やさしい乙女 [月刊人民中国 1982年7月号] 四姑娘山 [同志社大学 1982年10月刊] 四姑娘山群 [広島山の会 1994年1月刊]

登山の概要

■主峰 (6250m)

1981年

4月～5月 南東稜 同志社大学隊

4月13日から入山。偵察の結果ルートを決し21日BCを4500mに設営。南東稜に続く5620mピークを越えたが、C1が雪崩に襲われるなどのアクシデントのため登頂を断念。「隊長：和田豊司(33) 吹田佳晴(31) 宮崎貴文(28) 高橋由文(29) 角谷弘司(25) 岩田喬(21) 西村邦彦(19) 長谷川常男(48)」

7月～8月 南東稜 同志社大学隊

7月12日BC設営。南東稜に取りつき5200mにC1設営。クローワールから南東稜に出て5750mにC2を設営。28日吹田、角谷の2名が初登頂に成功した。翌日に高橋、岩田も登頂。30日には宮崎、田川、紅野の3名も登頂し、宮崎、田川の両名は北峰にも足を延ばし南峰が高いことを確認した。

「隊長：川田哲二(41) 吹田佳晴(31) 高橋由文(29) 宮崎貴文(28) 田川潤(27) 角谷弘司(25) 岩田喬(21) 紅野慎一郎(36) 西村邦彦(19) 瀧俊彦(31)」

[壮士征姑娘羅姑娘愛壮士 鋭鋒・四姑娘山の初登頂(川田哲二) [岳人412号 1981年10月号]

1981年

10月 北壁 アメリカ隊

3600mにベース・キャンプを設営。北壁45

00mにC1を作り5490mまで達したが断念した。

「隊長：ジャック・タックル、ジム・ドニニ、キム・シュミッツ、ジム・カンツラー」

[AAJ. Vol.24-1982 尚、山岳年鑑82に登頂とあるのは誤り]

1983年

9月 北壁 試登 日本ヒマラヤ協会隊

9月29日ヤンカンズから谷に入り、途中でビバークし、翌日右岩稜の4900mまで登った。

「隊長：角田不二(31) 吉田憲司(30)」

[四姑娘山の旅(角田不二) ヒマラヤ145号]

1991年

8月～9月 南東稜 拓殖大学隊

南東稜からの登頂を目指して9名で西面に入山。8月6日3500mにベース・キャンプ設営。ABCを4400mに作り16日5100mにC1を設営し、26日南東稜の5630mに出てC2設営。しかし、悪天候で停滞を余儀なくされ断念した。

「隊長：井上功(49) 樋口兼次(47) 高松政守(49) 愛知俊之(49) 野原敏夫(42) 後藤守夫(42) 榛葉武(21) 佐藤友彦(23) 枝村明(22)」

1992年

6月～7月 南壁 広島山の会隊

南壁からの初登攀を目指して9名が入山。

6月29日西面3500mにベース・キャンプを設営。7月6日南壁に入った4900mにC1設営。12日5200mにC2を設営するも雪で潰され、17日再び設営。22日5450mにC3設営。翌日西稜に抜け、24日9時45分小寺、斎田の両名が初登攀に成功した。続いて0時32分両名、山本も登頂し、翌日にも吉村、内山、森山の3名も登頂した。

「隊長：吉村千春(33) 桑原良敏(65) 小寺敬止(37) 両名輝正(35) 内山龍司(35) 山本茂樹(34) 斎田功(31) 森山勇(26) 小野隆司(30)」

[四姑娘山南壁へ(吉村千春) 岩と雪156号]

■二姑娘山 (5276m)

1981年

5月 南東稜 同志社大学隊

花海子の手前4500mにキャンプ。5月12日太姑娘山との間に食い込む谷を登り、途中から南東稜に出て5時間半で李慶を含む全員が登頂した。尚、翌日和田、角谷は太姑娘山に登頂し南稜を下降した。

「隊長：和田豊司(33) 吹田佳晴(31) 角谷弘司(25) 西村邦彦(19)」

「四姑娘山-1981-」1982年10月刊]

1985年

7月 南東稜 マウンテン・トリップ隊

尾崎啓一ら8名が入山。二姑娘山と太姑娘山に登頂した。

「山岳年鑑86」

8月 南東稜 小田原山岳会隊

山岸隊長ら3名が7日登頂。翌日には鍋島を含めた4名で太姑娘山にも登頂した。

「隊長：山岸和男(40) 国原正光(26) 佐藤久(29) 鍋島真美(24)」

1992年

8月 南東稜 さがみ家族山の会

8日4350mにベース・キャンプ設営。9日4700mにC1を作り11日全員が登頂した。

「隊長：山岸和男(47) 佐々木昭正(55) 林トシ子(46) 吉岡忠光(34)」

8月 南東稜 日本ヒマラヤ協会

7日4350mにベース・キャンプ設営。9日

7名が太姑娘山に登頂。二姑娘山南東稜の5100mまで登ったものの、悪天候のため登頂を断念した。

「隊長：酒井國光(53) 岩田達雄(64) 仕名野完治(56) 天野一郎(45) 小太刀健(43) 大久保博(43) 谷田川武(38)」

「美しき谷の姉妹峰-四姑娘山登山の記録」

1993年3月刊]

■岩峰群

1981年 プニュー (5413m)

初登頂したアメリカ隊によってセレスチャル・ピークと呼ばれた。10月2日2872mにベース・キャンプ設営。南西壁を登りC2を4726mに設営。10月8日パールマン、ステック、ラルルの3名が初登頂に成功。翌日ワグスタッフ、シュナイダー、ホワイも登頂した。「隊長：アレン・ステック(57) テッド・ヴェイル、エリック・パールマン、ピート・ホワイ、ブロック・ワグスタッフ、ボブ・シュナイダー、ビル・ラルル、ピーター・クリカ」[中国側四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォールを攀る(エリック・パールマン) 岩と雪106号]

1985年 プニュー (5413m)

アメリカのキース・ブラウンが南東稜から単独で初登攀し、東壁を下降した。

5-7 シュエバオ・ディン (雪宝頂・Xuebao Ding)

* 山脈：横断山脈。岷山山脈最高峰。

* 位置：成都(505m)の北約224km。松藩の東23km。南西約53km。[32° 7' N, 103° 8' E]

* アプローチ：成都がスタート地点である。成都から北北西に向かい灌県を経て汶川から北に向かい松藩に到る。ここまでジープで一日であるが、夏期は洪水などで道路が決壊する。この場合、汶川から西に回り紅原高原経由の迂回路を通ると二日行程となる。松藩から戻って大姓付近までジープが入るが、その先は徒歩半日行程で麻病村に着く。ここから4時間の登りで南面4170mのBC

予定地である。

* ルートの所要日数：91年のH A J隊はBC設営後7日で登頂。

* 山の概念：主峰5588m。5359m峰。小雪宝頂5026m。

* 通常の登山時期：春、夏、秋のシーズン。

* 山名：別名雪欄山。チベット族は吉祥と幸福のシンボルとみなし、人類に幸福をもたらす「福山」と呼んでおり、毎年6月16日に巡礼が行われる。

* 小史：なし。

* 参考文献：ヒマラヤ174号「雪宝頂及びその姉

登山の概要

■主峰（5588m）

1986年

7月～8月 南 稜 日中合同隊

日本ヒマラヤ協会と四川省登山協会の合同登山隊が初登頂を目指して入山。7月30日南面4170m地点にBC設営。8月4日5100mにC1を出し翌日八木原、中岡、菅原、大金の4名が初登頂に成功。翌日にも中国側の張、楊、王華山、王馬特、李と日本側の森山、福山、天城、三好の9名も登頂した。

「日本側隊長：遠藤登(55) 八木原昭明(39) 中岡久(36) 森山公美丈(44) 福山佑(42) 天城敏彦(38) 菅野千尋(37) 菅原和明(30) 三好喜代美(29) 大金信夫(26)」

「中国側隊長：鄭栄発(55) 張え援(33) 楊久輝(32) 王華山(29) 王馬特(29) 李慶(26) 通訳：羅凡(26)」

「天府の霊峰 雪宝頂 1987年5月刊」

1990年

7月～8月 南 稜 さがみ家族山の会隊

7月26日BC設営。HAJルートの左から取りつき5100mにC1設営。8月2日山岸、我妻研の2名が登頂に成功した。

「隊長：山岸和男(45) 我妻研(49) 金山久夫、

我妻伊津子(48) 高橋寿夫」

「雪宝頂の白い鋭峰 1990年11月刊」

1991年

7月～8月 南 稜 日本ヒマラヤ協会隊

8月5日BC設営。HAJルートに入り、5100mにC1を設営し、12日森山、平川、戸部、久保、柏倉の5名が登頂。翌日にも酒井、中居、合田の3名が登頂した。

「隊長：酒井國光(52) 山森欣一(47) 江尻健二(58) 平川宏子(51) 三輪力(48) 森山安次(41) 戸部秀男(40) 久保均(37) 柏倉秀克(35) 小野田靖(34) 中居満穂(29) 合田祐介(23) 山森直樹(13)」

「麗しき四川の夏－雪宝頂登頂 92年12月刊」

■小雪宝頂（5026m）

1991年

7月～8月 南 面 さがみ家族山の会隊

7月27日4100mにBC設営。4500mにC1、4800mにC2を設営し、30日両山岸、両我妻、川村、玉井、山藤の7名が初登頂に成功した。

「隊長：山岸和男(46) 我妻研(50) 我妻伊津子(49) 山岸喜世(43) 金山久子(28) 川村登茂子(42) 玉井章夫(28) 山藤康之(28) 佐々木映正(54) 秋元和正(47) 桜井信男(44) 桜井加代子(44)」

「美しき白い峰・小雪宝頂 1991年10月刊」

5-8 ヤンゴンシャン（羊拱山・Yanggongshan）

* 山脈：横断山脈。岷山山脈最高峰。

* 位置：成都(505m)の北西約218km。黒水の北西約30km [32° ' N, 102° ' E]

* アプローチ：成都がスタート地点である。成都から北北西に向かい瀘県を経て汶川から北東に向かい茂県に到る。ここから北西に向かい三打古に到る。ここまでジープで成都2日半の行程。さらに馬で一日で東面のBC3400mに入る。

* ルートの所要日数：91年のJAC隊はBC設営後7日で登頂。

* 山の概念：主峰5273m。

* 通常の登山時期：春、夏、秋のシーズン。

* 山名：不明。

* 小史：なし。

* 参考文献：なし。

登山の概要

■主峰（5273m）

1991年

7月～8月 東 面 JAC宮城支部隊

8月4日東面3400mにBC設営。C13500m C24200mと進め、11日遠藤、庄司、千田、中里、西郡の5名が東面氷河から初登頂に成

功した。

「隊長：佐々木郁男(57) 西郡光昭(51) 庄司
駒男(60) 千田早苗(54) 佐々木豊福(46) 吉
野禎造(66) 熊谷藤子(61) 遠藤昭治(63) 星

勝男(58) 中里政信(36)」

〔四川省羊拱山に登る(西郡光昭) 山558号
1991年11月刊〕

5-9 メーリー・シュエシャン(梅里雪山)

* 山脈：横断山脈。

* 位置：昆明(1891m)の北西約550km。徳欽の西
約25km。[32° 16' ~33° N, 98° 30' ~
52° E]

* アプローチ：昆明がスタート地点である。昆明
までは北京から飛行機で3時間の旅。昆明
から大理、麗江、中甸を経て徳欽に到る。
ここまではジープで三日間の旅。徳欽から
永忠までジープ。永忠から拉松拉(3860m)
の峠を越えて雨崩村(3200m)まで徒歩で一
日。さらに笑農(3600m)までは徒歩3時間。
ここがBCとなる。

* ルートの所要日数：1990年12月に主峰を南東稜
から攻めた日中合同登山隊は、BC設営後
27日間で6470mまで達した。

* 山の概念：主峰6740m。主峰の北西11.5kmに65
09m峰。南東13.5kmにはメンツムと呼ば
れ美しく聳える6054m峰がある他、北西か
ら南東に幾つもの5000m級の山々が連なっ
ている。

* 通常の登山時期：11月~12月の冬。

* 山名：主峰には別名としてカワグボがあるが、
チベットの皇帝の意味。チベット族はこの
山を「八つの仏の山」とか「聖なる山と土
地」ともいい巡礼にやって来る。

* 小史：キングドン・ウォードが1911年と13年に
接近し、東面に可能性ありと指摘した。

* 参考文献：ヒマラヤの東(中村保) [山と溪谷
社 1996年3月刊] 梅里雪山事故調査報
告書 [京大学士山岳会 1992年3月刊]

登山の概要

■主峰(6740m)

1987年

8月~9月 東面 上越山岳協会隊

8月17日明永氷河の3010mにBC設営し、
ABCを3750mに設営。雨が多くC1を右岸
の稜上4200mに設けたのは27日。31日には47
50mにC2を出したが、翌日4940mに達した
所で大クレバスに阻まれ登山を断念した。

「隊長：渡辺義一郎(42) 阿部一雄 中村治、
矢萩徹、竹田直樹、岡田勝彦、春日良樹、竹
中修平、飯塚清子」

1988年

5月 アメリカ隊

悪天候のため5000mで断念した。

「ニック・クリンチ、トム・ホーンバイン、
リサ・ショーニング、ウッドワード・キング
マン、リチャード・ウィルセイ、ボブ・パー
ス、ロベルト・スコネ、アダムス・カーター
夫妻」

[AAJ Vol.31 & モンフラン物語(吉沢一
郎) 山と溪谷636号&638号]

10月~11月 北面偵察 京都大学隊

10月23日北面支拉山稜3750mにBC設営。
4140mにC1を出し、4350mまで達した。

「日本側：倉智清司(39) 米谷佳晃(30) 広瀬
顕(25) 児玉裕介(21)」

「中国側隊長：玉振華(53) 張俊(31) 金俊喜
(33) 孫維琦(28) 李之雲(32) 王建華」

1989年

9月~11月 北面 日中合同登山隊

10月4日北面3850mにBC設営。シェンチェ
ンバオ氷河にルートをとのぼし、10月27日C1
を4660mに設営。11月2日5000mに到達した
が、デボ地が氷雪崩に襲われたこともあって
撤退する。その後偵察で北東稜5400mのコル
に到達した。

「日本側総隊長：左右田健次(56) 酒井敏明
(57) 横山宏太郎(42) 倉智清司(40) 蔵屋敷

隆二(47) 米谷佳晃(31) 近藤祐史(31) 中山茂樹(27) 広瀬頭(26) 児玉裕介(22) 工藤俊二(20) 岩坪聆子(53) 安仁屋政武(44) 今西秀明(40)

「中国側総隊長：楊必育(56) 王振華(54) 李崇礼(55) 金俊喜(35) 孫維琦(29) 前星(32) 張俊(32) 李之雲(33) 王建華(36)」

1990年

2月～4月 東面偵察 日中合同登山隊

3月1日雨崩の先3600mにB C設営。雨崩氷河に入り、8日4600m地点にC 1設営。11日5300mにC 2設営。太子山のコル5500mまで到達偵察する。

「日本側隊長：井上治郎(44) 中山茂樹(27) 広瀬頭(27) 工藤俊二(20)」

「中国側隊長：宋志義(38) 陳尚仁(51) 李之雪(33) 金俊喜(35) 孫維琦(29) 王建華(36)」

1990年～91年

11月～1月 東 面 日中合同登山隊

12月1日笑農3470mにB C設営。雨崩氷河に入り、8日4500mにB C設営。コルを越えた5300mにC 2設営。20日5100mにC 3設営。南稜に出る三本のバットレスのうち第二バットレスに登路を作る。26日C 4をバットレス最上部の氷壁の下5900mに設営。27日6120mに到達。翌28日近藤、船原、広瀬、宋、孫の5名が頂上アタックのため8時C 4を出発。13時6470mに達した時、天候悪化し下降するが、固定ロープの最終点が見つからずC 4帰着が23時22分となる。この日第二次アタック隊の7名もC 4入りしていた。結局日本側11名と中国側6名の合計17名が30日までにC 3に集結した。1月1日はC 1からの逆ボッカに6名、C 4荷上げ等に7名が行動。2日は大雪のため全員C 3で停滞。3日22時15分がC 3とB Cの最後の交信となり以後消息を絶った。

「日本側総隊長：左右田健次(57) 井上治郎(45) 佐々木哲男(38) 清水久信(36) 近藤裕史(33) 米谷佳晃(32) 宗森行生(32) 船原尚武(30) 広瀬頭(27) 児玉裕介(23) 笹倉俊一(21) 工藤俊二(21)」

「中国側総隊長：楊必育(57) 李崇礼(55) 陳尚仁(52) 宋志義(40) 金俊喜(36) 孫維琦(31) 張俊(33) 李之雲(34) 王建華(37)」

*協力員：期那次里(26) 林文生(22) 余新華(21) 松吉(22) 扎史吾(26) 扎文吉才(25) 羅桑多吉(25)」

1991年

1月 救援隊

北京から陳建軍、李致新、王勇峰、羅申、ラサから仁青平措、嘎亜、阿克布、丹增多吉、拉巴、尼瑪次仁、日本から横山宏太郎、浅野純一(32) 牛田一成(36) 門田勤(37) 人見五郎(35) 高井正成(28) らが救援のため現地入りしたが、結局20日にチベット隊が5300mのコルに達したものの悪天候のため、25日救援を断念した。

4月～5月 搜索隊

4月27日B C設営。19日4150mのラッパロに到達。結局ここが最高到達点となり15日撤収となる。

「日本側隊長：岩坪五郎(57) 牛田一成(36) 伊藤宏範(33) 窪田順平(33) 中川潔(33) 山田和人(31) 中山茂樹(29) 舟川晋也(26) 内藤望(24) 藤田耕史(22) 木原靖郎(54) 利岡徹馬(32)」

「中国側隊長：曾曙生(52) 仁青平措(48) 陳尚仁(52) 張俊(34) 陳建軍(36) 李致新(29) 阿克布(29) 旦增多吉(30) 拉巴(26) 洛則(29) 加措(31) 李豪傑(29)」

■6509m峰

1992年

10月 アメリカ隊

北にあるシュ・ラ（チベット自治区との省境）の4270mにB Cを設営し、6509m峰に接近すべく試みたが降雪のため峠に荷上げ出来ずに断念した。尚、シェーニングとドリッグスが峠の北にある5292m峰の初登頂に成功した。

「ニコラス・クリンチ、ピーター・ダビス、ゲアリー・ドリッグス、ブリアン・オコネック、ダイアナ・オコネック、ピーター・スコニン、エドワード・ロス」

5-10 ユイロン・シュエション (玉龍雪山・Yuilong Xueshan)

- * 山脈：横断山脈。
- * 位置：昆明(1891km)の北西約340km。麗江の北約25km。[27° 0' N, 100° 1' E]
- * アプローチ：昆明がスタート地点である。昆明までは北京から飛行機で3時間の旅。昆明から大理を経て麗江(2400m)に到る。ここまではジープで二日の旅。さらにジープで一時間半で東面3100mのBC地に着く。
- * ルートの所要日数：1984年4月に主峰の東面に入ったH A J隊はBC設営後、7日間で北東稜のコル5100mに到達した。
- * 山の概念：主峰5596m。主峰の北を中心に5000m級の山々十数座ある連峰である。
- * 通常の登山時期：春と秋。
- * 山名：主峰は伝説では「天を支える柱」と呼ばれる。
- * 小史：1930年にニュージーランド隊が試登した。また、1964年に中国地質学院隊が連峰のどこかの峰に登頂した。
- * 参考文献：氷山雪嶺二千年 [ベースボール・マガジン社 1985年3月刊]

登山の概要

■主峰 (5596m)

1984年

4月 東 面 日本ヒマラヤ協会隊

4月8日東面3100mにBC設営。東面をトラバースするように進み、途中ABC、中継キャンプを出し、15日北東稜の取り付け東壁基部4800mをC1として北東稜のコル5100mに到達したものの、北東稜のあまりにも壮絶さに登頂を断念した。

「隊長：飛田和夫(38) 関久雄(33) 遠藤京子(45) 遠藤喜重郎(37)」

[雲南の山旅—遥かな山 ヒマラヤ153号]

1985年

10月 北東稜 アメリカ隊

北東稜から登頂を目指したが悪天候で1.5

mの降雪があり登頂を断念した。

「ボブ・スネイダー、ブロック・ワグスタッフ、クリス・ジョネス、ブレット・バーナード、ディブ・チック、ステーブ・ラッセル」
[A A J Vol.28]

1986年

4月 北東稜 アメリカ隊

前年アメリカ隊と同じ場所にBC設営。北東稜のコルに出て頂上アタックをかけたが、次から次へと敗退した。

「エリック・パールマン、ミック・デイロ、ダン・バットウインズ、アンディ・フレッド、ルース・ファレ=ブラック、アンドレー・バルマー、ケニー・モーゼ」
[A A J Vol.29]

1987年

5月 東 壁 アメリカ隊

5月3日東面3230mにBC設営。翌日ABC(4200m)氷河上4880mに前進キャンプを設営。8日エリック、フィル、ジョンの3名がアタックしたが、午後2時稜線に出たところでフィルが断念、残る2名は3時45分初登頂に成功した。

「隊長：エリック・パールマン、フィル・ベラルタ=ラモス、ジョン・ウォーフィールド、マーティ・ガラリー」

[岩と雪129号 A A J Vol.30]

■ 寸 感 ■

平成8年8月8日8時8分に888mの山に登ると、8が八つで末広がりでなんと縁起がいい！

無宗楽生会が主催した静岡県の竜爪山周辺の様立山イベントに八木原と共に参加した。テレビ局が数局にヘリ3機が飛び、88歳のお婆さん、昭和8年8月8日生など地元を挙げての登山だった。

(Y)



事務局日誌(8月)

- 6日(火) チベット登山協会からヤンラ・カンリの件でFAXあり
- 7日(水) ディリースポーツの取材あり
- 10日(土) ヒマラヤ298号発送
- 14日(水) 萬栄ビル契約更新
- 24日(土) 山森専務理事ヤンラ・カンリ認定と偵察のため出発
- 25日(日) ムスターグ・アタ隊5名帰国
- 26日(月) 東京集会(9名)

ヒマラヤ No.299 (10月号)

平成8年9月10日印刷 8年10月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION&TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004